

NEWS LETTER

from *Iwami Art Museum*

February 2024 vol.38



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「111年目の中原淳一」
「着ること」から暮らしを変える試み

企画展「堀内誠一 絵の世界」
堀内誠一の多彩な「絵の仕事」

コレクション展「印刷物の中の森英恵」
言葉の中に、若き日のデザイナーの姿を追う

38

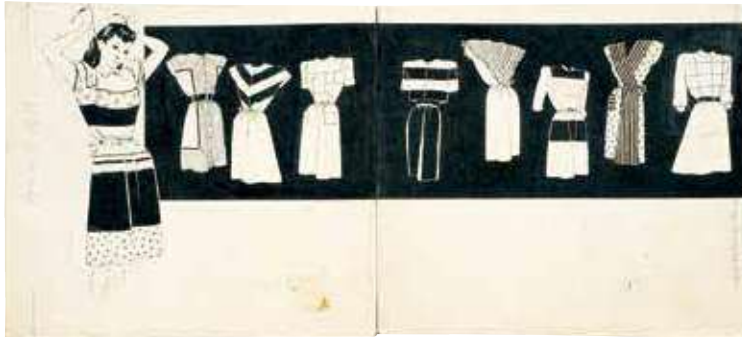


中原淳一 屏絵原画「中原淳一ブラウス集」 1955年 個人蔵
© JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA

「111年目の中原淳一」

2024年4月20日(土)～6月17日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



A

A. 《つぎはぎの服》(『ソレイユ』第4号原画) 1947年

B. 《パッチワークの二部式きもの》 1953年

すべて個人蔵 © JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA



B

「着ること」から暮らしを変える試み

中原淳一は終戦からちょうど一年後の1946年8月15日に雑誌『それいゆ』を創刊した。「ほんとうの意味で美しい暮らしを知る本を作りたい」という信念のもと編まれた、若い女性を対象にライフスタイルを提案するユニークな雑誌である。衣食住なかでも「衣」、「着ること」に重点を置いていた。同誌で中原が担当した記事「それいゆばたん」は、終刊となる1960年まで連載され、若い女性にふさわしい服や小物を取り上げるとともに、着こなしのヒントなどをイラストと文章とで紹介した。加えて、田中千代、杉野芳子、桑沢洋子、花森安治、森英恵といった、装いのスペシャリストらによる記事が度々掲載された。『それいゆ』から間をおかず創刊した少女雑誌『ひまわり』でも、連載「みだしなみせくしょん」を担当し、少女のためのスタイルを紹介した。同連載は、『ひまわり』の後継雑誌『ジュニアそれいゆ』にも引き継がれており、彼が「着ること」に、強い関心を寄せ続けていたことがわかる。

『それいゆ』創刊は、戦後直後の、着るものはおろか日々の食べものにも困窮していた時期である。服を仕立てるための新しい生地を手に入れることが難しかったことから(当時服は買うものではなく仕立てるものだった)、着古した服などを再利用して作る更

生服が主流だった。むろんこの更生服は、物資不足だった戦中から盛んに作られていた。中原は戦中、雑誌『少女の友』連載の「女学生服装帖」でセーラー服を仕立て替えた洒落たワンピースなどを提案した。『それいゆ』でも、創刊からしばらくは更生服をいくつも紹介している。(図A)で描かれたのは、パッチワークで手近な布を継ぎ合わせたさまざまな更生服で、いずれも肩をいからせウエストを絞った当時の流行のシルエットを取り入れている。それはやむなく作られた「更生服」というより「新しいスタイル」であり、それゆえに戦中戦後に女性たちを強く惹きつけたのである。

戦後復興がすすんだ1950年代初頭、洋装の普及により着られなくなっていた和服が復活するきざしが見られた。今和次郎や花森安治は、戦後の新しい時代にふさわしいのは洋装であり、和服が再び着られだした現状を批判している^{※1}。他方、洋服のデザイナーとして知られた田中千代は、『それいゆ』誌上で「和服を土台にして、それに洋服のデザインを思いきって取り入れた新しいきものを紹介した^{※2}。中原も「むかしのままの和服は着られないんです。」と述べ^{※3}、同誌上で若い女性向けのきものをいくつも発表している。本展で紹介するいくつ

かのきものは、彼の洋服のデザインとも通じる「淳一テイスト」が色濃くみられるものだ。(図B)は、端切れをランダムに組み合わせた生地を用いた上衣と巻きスカート状の下衣とに分かれたきもので、全く古びない魅力がある。

中原は、新しい服のデザインをスタイル画と呼ばれるイラストで表現したが、1953年頃から実際に服を仕立てて写真に撮り、雑誌に載せるようになった。スタイル画と写真から、より立体的に服の魅力を楽しめるような仕掛けである。加えて、読者に対し、雑誌で紹介するバリモードや提案する新しいスタイルを漫然と受け入れるのではなく、「自分らしさ」を生かして着こなすように説いた。

戦後の混沌とした時期から、中原が高い理想を掲げ、女性たちに美しい装いのあり方を、雑誌という当時影響力のあったメディアを通して提案し続けたのは、着るという日常的な行為にこそ、厳しい暮らしを変えていく力があることをよく知っていたからだろう。

※1 今和次郎「今日の服装—和服愛好の風潮に対して」『被覆文化』15号、1952年、4-7頁。花森安治「和服ばかり」『服飾の読本』、1950年、109-111頁。

※2 「新しい和服の試み」『それいゆ』14号、1949年、53-62頁。

※3 「アメリカンスタイルはごめんか」『装苑』1952年10月、79頁。

「堀内誠一 絵の世界」

2024年7月6日(土)～9月2日(月)

休館日:毎週火曜日(ただし8月13日は開館) 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

企
画
展



図1

anan
BRUTUS
POPEYE Olive
たぐさんのふしぎ

図2



図3

図1.《青いサーカス一家》 1950年 油彩・キャンヴァス

図2. 堀内誠一が手がけたロゴデザイン 1970～82年

図3.『ぐるんぱのようちえん』 1965年 福音館書店

いずれも © Seiichi Horiuchi

堀内誠一の多彩な「絵の仕事」

時代を象徴する仕事を残した人物のなかには時折、一代でこなす量とは思えないほど多彩で豊かな仕事を残す人がいる。

堀内誠一(1932-1987)もその一人である。「アートディレクター」「デザイナー」「絵本作家」「旅行家」「絵本批評家」など、堀内は生涯で幾つもの肩書を持ち、戦後の日本、資本主義経済が急速に発展をとげた激動の昭和時代を駆け抜けた。筆者が初めて展覧会で堀内の雑誌の原稿や絵本の原画を目にしたとき、その色彩構成の巧さと瑞々しいタッチに新鮮な感動を覚えた。仕事人として、そして表現者としての才能の洪水を一気に浴びせられた感覚があり、時代を超えて色褪せないもの(感性)とはこういうものかと実感した。是非島根県でも多くの人に堀内誠一の仕事を見てもらいたいと思い、本企画展の巡回館に加えてもらい、このたびの実施に至った。

堀内誠一は1932年、東京都市本所区(現在の東京都墨田区)に凶案家の父・堀内治雄と母咲子の長男として誕生した。幼少期から父の師匠にあたる商業美術家・多田北鳥の工房や父の経営するスタジオで遊び、商業デザインの現場に身近に触れる。1947年、14歳の時に新宿伊勢丹百貨店の宣伝課に入社。同社では、看

板のレタリング書きやウィンドウディスプレイのデザイン、PR誌『ISETAN BOUQUET』の編集や挿画・イラストなどを担当。一方で、現代絵画研究所や自由美術家協会などの画塾にも通い、ピカソや松本竣介などに影響を受けた油彩画を描いた(図1)。

1956年、伊勢丹百貨店を退社し、翌年デザイン事務所「アド・センター」の創立メンバーとなる。既に『ロココール』『装いの泉』などの雑誌のデザインやアートディレクションを手掛けていた堀内は、ここでも『週刊平凡』『平凡パンチ』で細江英公、立木義浩ら、のちに日本を代表するカメラマンらと組んで斬新な誌面作りを展開したり、広告業界で大きな存在感を示す。1970年、アド・センターを退職後、新しく創刊した女性雑誌『anan』のアートディレクターに就任。海外取材を敢行し、女性たちの新しいライフスタイルを提案した、魅惑的なヴィジュアルイメージを打ち出した。また、誰もが一度は目にしたことのある『POPEYE』『BRUTUS』『Olive』などの雑誌のロゴデザインや、『血と薔薇』『いりふね・でふね』など個性的な雑誌やミニコミ誌のデザインやアートディレクションを担い、新時代の雑誌の黄金期を牽引した(図2)。

絵本作家・堀内誠一としてのデビューはかなり早い時期となる。最初の絵本『くろうま

ブランキー』の刊行(1958年)を皮切りに、翌年には『七つのからす』を、1964年には自らストーリーも手がけた『おおきくなるの』を上梓した。1956年、福音館書店が創刊した月刊絵本「こどものとも」の編集長、松居直との出会いが、絵本の仕事を始めるきっかけとなるが、のちに堀内自身「実は、絵本作家の道こそ運命が決めた本命」と語っており、それを示すかのように、生涯で60冊以上にのぼる絵本を世に出した。今も人気の高い『たろうシリーズ』や240万部を超えるベストセラー『ぐるんぱのようちえん』(図3)は、年齢問わず多くのファンがいることで知られる。

絵本に登場するキャラクターたちは、様々な技法を用いて描かれ、色の組み合わせによる構図バランスも絶妙で、実験的で遊び心のある絵本のページにはつつい見入ってしまう。

堀内は、1974年から81年までフランスのパリ近郊に居住。交流の深かった安野光雅や谷川俊太郎と旅行したり、欧州各地を旅して何冊もの絵入り旅行記やガイド本を出版。1987年、54歳で生涯を終えるまで、絵本やデザインの仕事を続けた。抜群の感性で人生を切り開いた堀内誠一の絵の世界を、この機会に是非ご覧いただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)

「印刷物の中の森英恵」

2024年6月5日(水)～7月22日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

言葉の中に、若き日のデザイナーの姿を追う

世界を舞台に活躍したファッションデザイナー、森英恵(1926-2022)。郷土の偉人の一人である森の仕事について、当館ではこれまで繰り返し紹介してきた。しかしその大半は衣裳展示で、森の言葉については深掘りしてこなかった。6月5日から始まるコレクション展「印刷物の中の森英恵」では、森の言葉を紐解き、その創作を支える思想に触れてみたいと考えている。

森は1954年頃から洋裁雑誌や婦人雑誌などに服のデザインやテキストを寄せ、装いの指南や提案をした。1958年には『装苑』で連載をもち、1966年には『森英恵流行通信』(図1)を自社で刊行して自身の最新コレクションや国内外のファッショントレンドを伝えている。いずれも言葉選びが巧みで、文の流れやリズムも小気味良い。森の文章には言葉でしか味わえない面白さ、うまさがある。ここで少し紹介したい。

洋裁雑誌『装苑』の1956年11月号に掲載された「わたくしの店・わたくしのお客さま」(図2)は、日記風に仕立てられ、森の暮らしが垣間見えるテキストだ。このように始まる。

●月●日(月)

ジーン!

けたたましい電話のベルで目を覚ます。

撮影所から。「衣裳待ちだ…!」ががんだなる衣裳部屋のこわいKさんの声を受話器の奥からとび出してくる。私の時計はまだ八時半だというのに、もうすっかり“仕事の時間”の中にいる人のきびきびした声に、スッキリと目も冴える。こんなふうにして私の1日は、有無をいわず幕をあけられる。

テキストの始まりと一日の始まりを重ね、電話の音で読者を一気に引き込む手法はさすがと言える。森が新宿に自身の店「ひよしや」を構えたのが1951年のこと。店の近くの喫茶店でショーをしていたところ、映画関係者の目にとまり、衣裳制作を請け負うこととなる(1954-)。以降60年代を通して200本以上の映画に携わった。このエッセイを書いた1956年の秋は、日活に加え、松竹、東宝、東映、大映と5社掛け持ちで仕事をし、寝不足と戦いながら奮闘していた頃だ。前日も夜遅くまで制作していたであろう状況が想像されるエッセイは、以下のよう

この冬の流行色は黒が圧倒的だという。だが、一体流行とは何だろう。消費者が求めるものか、デザイナーの創造す

るものか、または巨大な繊維工業資本の隠然と作り上げる一つの風潮なのか。そのどれか一つ、またはそれらの複合なのだろうけれど、ただ一つ言えることは、一定のある形、またはある色が、ある時において美しく、またはある時には、全く美しくないという事実。それは多分複雑な社会的心理的な条件の作用と思われるが、いちやくそれを見、それを指摘し、それを、具体的に生活の中に生かすものこそがデザイナーであって、デオールといえども、無意味な、その大きな流れを無視することはできないと思う。

デザイナーは“ねつ造者”ではない。“予言者”でもありはしない。予知して“最初に”創るものなのだ。

大企業の思惑や消費者の需要の方向性は、時代を問わず消費経済を大きく動かすもの。物を作って売る仕事をする限りその大きなうねりと無縁ではいられないが、それは誰にとっても制御不能で抗うものではない。流行やデザイナーに対する森の見解が綴られているこのテキストだが、全体に諦念的ムードが漂っている。この頃森は映画衣裳のデザイナーとして知名度が上がり、その仕事が充実すればするほど「人の求めに答える映画衣裳は真の表現ではない」などと、服飾業界の人々から(名指しでないにしろ)批判された。ある所で褒められ求められる仕事が、すぐそばの別の所では痛烈に叩かれる現実。「社会的心理的な条件」の違いが両極端な評価を生むなかで、心を保ちながら懸命に仕事を続けた若きデザイナーの苦悩や葛藤がにじみ出た一節である。

(廣田理紗 当館専門学芸員)



図1



図2

図1. 『森英恵流行通信』創刊号表紙
1966年、ファッションハウス森英恵

図2. 森英恵「わたくしの店・わたくしのお客さま」『装苑』
1956年11月号、文化出版局